
ひぐらしのなく頃に 旅

黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に 旅

【Nコード】

N6329I

【作者名】

黒

【あらすじ】

親友が見つけた変なサイトに勝手に登録させられ、気がつけばそこはひぐらしのなく頃にの世界だった……！？果たして俺と、俺をこんな状況に追い込んだバカ（親友）は、この惨劇から逃れる事ができるのか？

この話はネタバレを含みますのでご注意ください。

始まり その巻（前書き）

はじめまして。この作品はひぐらしのなく頃にの二次創作でトリック物になります。

処女作にして初めて投稿になりますので変な所が多々あると思いますが、そこを御理解のしていただき、まだ若輩者ですがどうかよろしく願います。

始まり その巻

ゆっくりと、夢からさめるように意識が覚醒していく。
気がつくと、何故か知らない場所に立っていた。

「……どこだ、ここ？」

視界に入るのは、主に田んぼ、その先に山、あと家がちらほらと典型的な田舎の風景だ。今立っている所も道路ではなく砂利道である。そこで、ふと気がついた。

「あれ？ 俺の視点ってこんなに低かったか？」

確かな異常に気づき、胸騒ぎのする中、冷静に自分を観察してみよう。

「……嘘だろ？」

自分の本来あるべき18歳の体はどこにもなく、明らかに縮んで推定小学校高学年くらいの体が存在していた。

わけがわからず混乱していると、自分のすぐ近くに一人、人がいることに気がつき、見てみると、よく知っている奴がそこにいた。そして、どうやら向こうもこちらに気がついたようだ。

「陣！ 良かった陣がいてくれて……、ってかどうしたの！？ 何か凄いちっちゃくなってる！」

「知るか！ というか秋名、お前も少し縮んでるな。俺よりマシみたいけど」

俺の中学からの友人にして今では一番の親友である水越秋名みずこしあきながそこにいた。本来俺と同じ年であったはずのコイツは見たところ、どうやら中学生ぐらいまで縮んだらしい。ちなみに陣やしろとは俺の名前でありフルネームは社陣やしろである。

とりあえず俺一人ではないことに安堵しつつ、状況を確認してみる。

「おい、これはいったいどうなってんだ？」

「オレが知るわけ……。あれ？ いやまさか……」

何やらいきなりブツブツと言い出したところを見ると、どうやら秋名には心当たりがあるようだ。一刻も早くこのわけのわからない状況から抜け出したい俺は秋名に問いかける。

「何か、心当たりがあるみたいだな。俺に聞かせてくれないか？」

「……いや、でも有り得ないしつて、ヒイイい!!」

俺はできるだけ笑顔で問いかけたはずなのだが、なぜか悲鳴をあげ、とても怯えた表情をつくりながら、秋名が思い当たる心当たりを説明し始める。

「はあ!?!」

秋名の言った最初の一言は俺の想像を遙かに越えていた。

今コイツはなんて言った？ 俺の耳が正常なら『ここはひぐらしのなく頃にの世界だ』と聞こえたのだが……。

どうやら俺の耳は正常だったらしく、混乱しながらも、そのあとに続く秋名の説明を最後までなんとかまで聞き終えて、頭の中で整理

する。

とりあえず、ことの発端は、昨晚妙なサイトを発見し、そこには【ひぐらしのなく頃にの世界を貴方が救ってみませんか?】と、自分をオリジナルキャラとして登場させることができるゲームらしきものがある、120%怪しいサイトにまんまと載せられ、本名と現住所と性別を記入し、プレイヤーは複数登録できたらしく勝手に俺まで登録した(犯罪です!)らしい。ちなみに最初の3つ以外、年齢など他は色々と自由な設定が可能だったらしが年齢以外いじらなかつたとのこと。体が縮んだのはこれが原因のようだ。登録を済ませたあとは、しばらくお待ち下さいの画面が出てそれからしばらくたつてもその画面が消えなかつたらしく、そのまま寝てしまい、そして今にいたるようだ。

「つてな感じ何だけど……。有り得ないよね?」

「有り得ないって、どう考えてもそれが原因だろうが!」

「イデデデデ!」

この期に及んでアホな事を言う秋名の脇を思いつ切りつねってやる。本当ならぶん殴りたいところだが、背の関係上断念した。

「何でお前はいつもいつも、こうトラブルばかりもってきてくるんだ!」

そう、コイツは今まで幾度となくトラブルをもってきては俺を巻き込んできたのだ。

「いやだって、サイトが作ったただのゲームってしか思わなくて……。こんな事になるなんて誰も思わないうって!」

「100歩譲ってそれはいいでしょう。で、何で俺まで勝手に登録する？ しかも、どうみてもお前より年下だよな？」

そう言つと秋名は俺から目線を外し、モゴモゴと言いにくそうに言った。

「いや、一人はなんか寂しかったから、ならやっぱり親友の陣を入れようと思つて。あと、なんかいつつもおれ陣に世話になってばかりだから、たまにはオレが世話をするお兄さん気分をあげたいな。なんて思つたりして、つい……。」

はあ……

とりあえず、現状はなんとか理解できたが、問題が山積みである。

「で、これからどうする？ 衣食住は？ 金は？ どうやってこの雑見沢を惨劇から救うんだ？」

「詳しい事はこのゲーム(?)が始まってから説明があるって確か書いてあつた筈だけど……。」

と、丁度タイミングを見計らつたかのよう、いきなり携帯電話の着信音が聞こえてきた。

始まり その巻（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございます。

うん、ひぐらしの二次創作なのにキャラが一人も出てこないという

……。早く出したいんですが次の話でも出てきません。

本当にスイマセン。

とりあえず、主人公はこの二人になります。主人公二人って何だか自分のクビを絞めている感じがしますが、完結目指して頑張ります。できれば続きを読んでくれるけとを願って、よろしくお願いします。

始まり その式（前書き）

今回もオリジナルキャラしか出てきません……。

始まり その貳

着信音はすぐ近くで鳴っているみたいだ。それも複数。

二人で辺りを見回してみるが携帯電話どころか公衆電話すら見当たらない。と、そこでズボンに少し違和感を感じ、ポケットを調べると案の定、いつの間にか携帯電話が入っていた。

どうやら秋名のポケットにも俺と同じ型の携帯が入っていたらしく、あちらも、いつの間にか携帯電話が入っていたことに少々驚いているようだ。

携帯を開き、中のディスプレイを見てみると非通知からの着信だった。おそらく、秋名も同じだろう。

この時代にあるはずの無いもの。かといって元の世界で俺が持っていた物と同じではない……。

「……陣。どうする?」

「出るしかないだろ」

そう言って通話ボタンを押し、耳へともっていく。秋名も同じく電話に出る。そして、聞こえてきたのは男とも女ともとれる声をした奴だった。

『どうも、この度は我がサイトをご利用いただきありがとうございます』『今すぐに俺を元の世界に帰せ!』

「え! ちょっと……、陣!？」

俺の突然のセリフに秋名が驚く。悪いがハッキリ言って冗談じゃ

ない！ 何が楽しくてこんな死亡率の極めて高いゲーム（？）に参加しなければならぬのか。

今、電話で話したコイツは間違いなく俺達をこの世界に飛ばした張本人だ。なら、おそらく今俺が言ったことを実行する事ができるのはコイツしかいない。

『……えーと、まず私は、ご利用していただいたサイトの管理人です。それで、社陣様ですよ？ 自ら登録していながら帰せとは、とはどついう事でしょう？』

「……えーっと、それは、オレが勝手に本人の了承を得ないで登録してしまったからでして……」

俺が言おうと思ったことを先に秋名が話す。このことから向こうの携帯で話している奴と俺が話している奴は同じらしい。

『と、いうことは……』

「俺は手違いで此処にいて、このゲーム（？）に参加する気はない！」

『なるほど。しかし残念ながら一度、そちら』に行ってしまうと、今すぐに元の世界に帰ることはできません』

半ば予想はしていたが、やはり実際に言われると流石に堪える……。

『一度、そちら』に行ってしまう場合、この難見沢におきる惨劇を回避、正確には“古手梨花の望む未来”を叶えてあげれば、元の世界に戻ることが可能になります』

なるほど、つまり俺はどうあっても此処でおきる惨劇に付き合わなければいけないらしい。

秋名を見てみると、俺を見ながら申し訳なさそうな顔を浮かべている。今更、自分のやったことがどれほどの過ちだったのか、それを今更後悔してももう遅い。そして、過去には戻れない。

……なら、俺も覚悟を決めるしかない。

「わかった。なら、これから俺が言う質問に答えてもらう」

『はい。答えられる範囲であれば』

そして俺はいくつか質問をし、いくらか情報を得た。

まず、俺達の設定として、この世界で俺達の関係は親戚という事になっているらしく、俺と秋名の両親が同じ時期に他界し、雛見沢に住んでいる俺達の祖父に二人揃ってお世話になることになったらしいが、祖父は俺達が来る5日前に歳のことでもあって他界。他に引き取ってめらえる親戚もなく、よって俺達は亡き祖父の家に二人暮らしとなったらしい。

お金に関しては問題ないとのこと。あと、俺達が死んだ場合は古手梨花と同じように次の雛見沢に飛ぶようだ。それと、もし古手梨花がこの惨劇に立ち向かうことを完全に諦めてしまった場合は、そのまま今いるその世界に吞まれてしまい、二度とその世界から抜け出せなくなるらしいので、これだけは絶対に回避しなければならぬ。

『それと、この雛見沢を救うことができたのなら、願いを1つ叶えることができます』

「え！ それ本当！？ 何でもいいの？」

秋名が管理人の言った事に食い付く。

『はい。基本的に何でも大丈夫です』

管理人の言葉で秋名のやる気が一段と上がる。なんとも現金な奴だ……。

「……成る程ね。よくできてるな」

「ん？ 陣、どうかした？」

「いや、ただ願い事がもう決まったただけだ」

「はやつ！？」

秋名は俺の言ったことに驚いたようだ。そして、そのまま自分は何にするか悩み始めている。

『社陣様』

「なんだ？」

いきなり管理人から呼びかけられる。

『流石にこのまま強制参加は気の毒なので、陣様には特別に、少しサービスしておきます』

「サービス？」

『はい。どういったサービスかは、その内分かるはずですので』

とりあえず俺にとってプラスになってもマイナスにはなることはないだろうから、ありがたいことだと思っておこう。

『では、これから園崎家に行つて園崎お麴に会つた下さい。あちらには、もう話がいつてる筈なので、そちらでこれから住む家の場所や、これからの事を聞いて下さい。以上で説明を終了します。頑張つて下さい』

そう言い終わるといきなり電話が切られた。試しにリダイヤルしてみるが、案の定つながらない。

そんな事をしている内に秋名が俺に近づいてきていた。

「えーっと、まあ、心配しなくても大丈夫だよ！ 何たって俺達には原作の知識があるわけだし、その通りに動けば直ぐに帰れるって！」

一応、俺を励ましてくれていたようだが、とりあえずコイツの勘違いを正さなければならぬようだ。

「なあ、秋名。お前はもう『祭』はクリアしたよな？」

「へ？ 祭つて？」

どうやら分かってないらしい。

「『ひぐらしのなく頃に 祭』ってゲームだよ！」

俺が正確に言ってやると、ようやく合点がいったようだ。

「ああ！ うん、クリア済みだよ。で、それがどうかした？」

「なら質問だ。漫ろくし編で沙都子を救うために皆殺し編と同じ行動をとった場合、どうなった？」

「えーと、確か……ああ！！」

ようやく自分の勘違いに気づいたようだ。

「そう。時間が間に合わずに沙都子を救い出すより先に沙都子が壊れてしまい、バッドエンドになったよな」

つまり、

「原作通りに行動したからといって、必ず上手くいくという保証がないんだよ」

秋名にとってこの事実はあまりに衝撃的だったらしく、ショックの余り口をパクパクさせながら放心してしまっている。

「……じゃっ、じゃあどうすればいいんだよ！」

放心から覚めた秋名が狼狽気味に叫ぶ。

「俺が知るか。とりあえず行動あるのみだな」

「……まあ、そうだね。兎に角管理人の言う通り園崎家に行ってみよう」

ふと、ここまで話していて重大なことに気がついた。

「そついえば、園崎家ってどう行くんだ？」

「あ……」

いきなりだが、前途多難のようだ……。

始まり その式（後書き）

やっとここまで書けた……。けど、話が進まないorz
でも、次にやっどひぐらしのキャラを出しますので、これでなん
とかひぐらしの話っぽく……。なるかなあ。 . . . (. . .) (. . .)

始まり その参(前書き)

最近とても忙しくて書く時間がとれない……。
とにかくやっとな今回ひぐらしキャラが出てきます。

始まり その参

「……………やっと着いたね」

「ああ……………つつても、まだ門の前であつて家まではまだあるけどな」
村をうるつくこと約1時間、途中で出会つた人に道を尋ねながら
ようやく此処までこれた。

「ここから先、全部園崎家の土地なんだよね……………?」

「まあ、そうだろうな」

半ば呆れながら言う秋名に俺は素っ気なく返す。

「くだらないこと言つてないで、ほら、さっさと行くぞ」

そう言つて先に進む俺を見て、慌てて秋名が後を追つ。それから
少し進んで、ふと、そういえば秋名に言つておこつと思つていた事
を、今の内に言つてしまおうと思つた。

「なあ、秋名。今の内に言つておく事がある」

「ん？ なに?」

「この世界の惨劇は、お前一人で何とかしろ」

.....。

「……ごめん。もう一度言ってくれろ？」

「だから、この世界の惨劇はお前だけでなんとかしろって言ったんだよ」

暫し、秋名が固まる。

「……ちよつとまった！いきなり何を言つもの！？」

俺の予想した通りの反応をみせる秋名に、さて、今日の俺が言ったことにコイツは何回驚いたっけ？なんてことをぼんやり考えながら、目の前で騒ぐ秋名を見て軽くため息をつく。

「何をそんなに驚くことがある？ 忘れたか？ 俺が望んでこの世界にいるわけじゃないってこと」

「うっ……」

これを言われると流石に何も言えないらしく、さっきまで騒いでいた秋名が急に大人しくなる。しかし、まだ納得できてはいないようだ。

「……いや、でもほら、やっぱり二人の方が何かと良いわけであれだ！二人の方が早く元の世界に帰れるよ！」

必死に俺を説得しようとする秋名だが、どうも何か勘違いをしているみたいだ。

「……あのな。俺は別に元の世界にどうしても帰りたい訳じゃない」

「へ？ そうなの？」

俺が言ったことは、秋名にとって意外だったらしい。

「ああ……俺はただ、この難見沢でおきる惨劇に付き合いたくないだけだ。それに、どちらかといえば元の世界よりこっちの世界の方が、年齢としのことを除けば俺にとって都合がいい、だろ？」

秋名が俺の問いにうん……と頷き、今度は微妙に暗い顔になる。

そんな秋名を見て、コイツ此処に来てからころころと表情がよく変わるなと思いつつ苦笑する。

「何でお前がそんな顔するんだよ……。兎に角、俺は強制的に惨劇に巻き込まれる訳だが、別に俺が絶対に動かなきゃいけない訳でもない」

なら、と俺は言葉を続ける。

「別に俺が動かなくてもこの惨劇はお前一人でなんとかできるかもしれない。つてか俺をこんな状況に追い込んだ罰だ、一人でなんとかしてみせる。それに、お前なら可能だろ？」

そう俺が言い終わった後、秋名はうう……とかああ……とか暫く唸っていたが、やはり自分のやったことに責任を感じたのか最終的にはわかったと承諾した。

「あとお前に禁則事項を言うておく」

「なに？」

流石にこれ位はわかっているかも知れないが、念のために言っておく。

「俺達の持つ原作の知識は誰にも明かすな。まあ、どうせ古手梨花以外は理解できない、というか信じないだろうけど一応な」

なので、話すとしたら古手梨花にのみ限られることになる。羽入もいるが、あれはまだ実体化してないだろうから除外。

「えと、やっぱり言っちゃダメなんだ……」

「ああ。原作通りに動いて上手くいく可能性がない以上、俺達の知識を与えて、変に先入観をもたれても困るだろ？」

「まあ、確かに……」

それにもっと大事な意味もある。

「それと、もし話したとしたら、俺達のことまで話さなきゃならなくなるだろうが！ そんなこてになってみろ？ 確実に俺まで手伝わされることになる！」

「結局はそこ！？ ってか何で陣のことまで話す必要があるの？ 別にオレだけのことを話せばいいじゃん」

確かにその通りなのだが、俺達が現れたのはこの世界が初めての筈なので、もし秋名のことを話した後、じゃあ一緒にやって来た俺

は秋名とは関係ないの？ 的な展開になる可能性が高い。

何でもないように言い張る秋名に、俺はジト目を向けながら

「ふーん、お前だけの事情として説明できる自信があるのか？ お前に？」

と言った瞬間

「ごめんなさい。多分無理です……」

素直に謝った。

コイツの性格上、上手く誤魔化したり嘘をついたりするのが下手なので正しい判断だといえよう。

「俺から言いたいことは以上だ。それじゃ、さっさと行くか」

「おう！」

こうして話しを終えた俺達は再び園崎家に向かう。

それからしばらく進んで、ようやく家が見えたところに一人、人が立っていた。

「ん？ おーい！ こっちこっち！」

どっつやらこちらに気づいたらしく、手を振りながら俺達を呼んでいる。

とりあえず、待っていてくれるようなのでその人の下まで急いでいく。

「いやー、別に急がせる為にやったわけじゃないんだけど……ゴメンね？ 何だか急がせちゃったみたいで」

どうやら急に俺達が急いだことを悪いと思ったのか、いきなり謝られた。

「いや、村を結構あちこちとさまよって、此処まで来るのに時間がかかったから気にしないでいいよ」

「もしかして、オレ達の事、ここですつと待ってた……？」

そう言うのと、俺達は既に知っているその少女、園崎魅音はまあーねと言いながら笑顔をつくる。

「にしても、やっぱり迷ってたんだ。さすがに、ちょっと遅かったからもう少しで探しに行くところだったよ。」

「えーと、とりあえず心配をかけたみたいでごめんなさい。」

まず秋名が謝り、その後に俺も頭を下げる。

「いいよ、別に気にしてないから。とりあえず自己紹介からね、あたしの名前は園崎魅音。ちなみに、これから二人が通うことになる学校の委員長をやってるから、何かわからないことがあったら、おじさんに何でも相談してくれてかまわないからね」

魅音の自己紹介が終わり、その後、秋名、俺と順番に軽く自己紹介をした。

「ふーん、男の子が二人つては聞いてたけど……なかなかにかっこいいのが来たもんだねえ。こりゃあ、圭ちゃんも負けてられないかもね。」

そんな独り言を言い出す魅音。ちなみに魅音のセリフは秋名の顔を見ながら言っており、当然俺のことではない。

折角なので俺達のことを少し説明しておこう。まず、秋名だが、容姿は魅音の評価の通り。だからといってイケメンという訳でもなく、ただ、ああ……一応この人はかっこいい部類に入るなァーと思われる程度だ。あと成績優秀・運動神経抜群・大抵の事はなんでもできる奴である。ここまでなら誰でも殺意を覚えるだろうが、唯一の欠点としてコイツは、'バカ'なのだ。例えばテストで答えは正解しているのに解答欄を間違え、しかもそれに全く気づかず、全ての回答を終えても疑問に思わないのだからすごい。次に俺だが、容姿はいたっては普通、どこにでもいそうなくくありふれた顔であり、成績は秋名から勉強を教わっていたので成績は良い方だろう。運動神経はおそらく年齢に対して平均的である。

まあ、ざっとこんなものだろう。

「おっと、こんな事してる場合じゃなくて……家の中にどうぞ。婆っちゃんも待ってるからさ。」

魅音に言われるまま俺達二人は、お邪魔しますと、家にあがる。

そして魅音にある部屋まで案内され、入ってみると、そこには魅音の祖母である園崎お魎と何故か母親の園崎茜がそこにいた。

そこから約30分位だろうか？ お魎さんの体調のこともあり、挨拶から始まって色々な話をした。まず、身内の突然の死について励ましの言葉を貰い、これからの暮らしのこと、そして今は亡き祖父の話聞いた。

どうやら俺達の祖父はダム戦争で結構活躍していたらしく、話を

聞く限りでは園崎とも仲が良かったようだ。

こうして話がおわり。最後に

「あんた達、何か困ったことがあったら何でも言いな！ 力になっ
たげるからさ！ ね？ お母さん」

茜さんの言葉にお魎さんが頷く。まあ、俺達の境遇を考えればこ
んな事を言ってもらえるのも頷ける。それとどうやら祖父のおかげ
で、俺達も園崎家とは上手くやっていけそうだ。

それにしても、お魎さんはもつと恐いイメージがあったのだが、
ずっと穏やかでいたので少々驚きだった。

「魅音。二人の家まで案内してあげな。場所はわかるだろ？」

「うん。まかせといて」

そう言っ立ち上がる魅音を見て、それでは失礼しますと部屋か
ら出た。その際にいつでも遊びに来なと茜さんから声をかけられ、
とりあえずはいと答えておいた。

それから外に出て

「ん〜、何かすつごく緊張したー」

秋名が俺の隣で体をのびしながらそんなことを言う。確かに、そ
れについては同感である。

「それじゃあ、これから二人の家まで案内するから、ちゃんとい
てきてね」

そう言っ、案内を始めた魅音に俺達はついて行った。

始まり その参（後書き）

さて、とりあえずここまで読んで下さったことに感謝。

本当は今回の話と次にだす話とを合わせて“始まり その参”として出したかったんですが、まだできていないため、今回の話までにしました。そんなわけで、おそらく次の話は短くなると思われるますのでご了承下さい。

ちなみに気がついているかもしれませんが、主人公二人の一人称を、陣は『俺』 秋名は『オレ』 としているので、これで誰の視点か、とか誰のセリフか、とかが少しでも分かりやすくなっていれば幸いです。

でもこの場合、圭一はどうしよう……ひらがなで『おれ』？

始まり その四（前書き）

ようやく投稿できました……。予告どおり短いですが許して下さい。そして相変わらずひぐらしキャラとの絡みが少ない……。

始まり その四

案内をしてもらいながら、そのつど魅音が話しかけてきたり、村を説明してくれた。

そうして暫くたってから

「そういえば、二人の家は古手神社ってこの近くなんだ。ちなみにちよつと先だけど、その古手神社で大きな祭があるから楽しみにしててね」

魅音がそう言って少し進んだ後

「ほら、あそこに見える階段を上がった先が古手神社だよ」

どうやら古手神社の近くまできたらしく、魅音の説明を聞きながらその階段に目を向けると誰かが下りてきているのが見えた。

此処からでは少し遠い為誰だけはつきりと視認できないが、一人でないのは確かだ。少し進んでその姿がはつきりと分かる距離まで来たその瞬間、俺は驚愕する。

「あれ？ 沙都子に梨花ちゃん。どうしたの、今からお買い物か何か？」

魅音が階段から下りてきた人物、北条沙都子と古手梨花に気がつき声をかける。

「あら、魅音さん。ええ、そうですよ。それにしてもこんな所で会うなんて、何か用事でも？ それと、そちらのお二人はどなたで

すの？」

「みく。ボクも気になるのです」

二人は俺達の存在に気がつき、魅音に問いかける。

「ああ。この二人は今日から雛見沢に住むことになってね、家がこの近くなんだ。ちなみに、あたし達の学校に転校してくる事にもなってるから」

俺達の事について魅音が説明し、その後秋名が自己紹介を始めた。

「初めまして。オレの名前は水越秋名。そしてこっちは……」

そうやって俺に促すが、俺は未だに今起こっている事に理解が追いつかず先程から呆然としている。

なぜ？ そんな言葉しか浮かんでこない……。なぜ羽入が此処にいる？ いや、これは正しくない。正しくは、なぜ羽入が見えてくる？ だろう。そんな事ばかり頭の中で考えているので、今し方秋名に促されたにもかかわらず、何の反応もない俺に秋名を始め、此処にいるみんなが不信に思い始める。当然その中には羽入も含まれる為、自然とその視線が此方に向くことになるわけで……。

っ！？ マズい。今一瞬だが目があった。

俺がそんなことに焦っていると

「陣！ おゝい！ 大丈夫、聞こえますかー？」

秋名の声にはっとし、何とか落ち着きを取り戻しながら返事を返す。

「あ、ああ……悪い。ちょっとぼーっとしてたみたいだ……。」

「おやおや〜。まさか二人に見とれてたのかな〜？」

魅音がちやかしにはいるが、それを俺は無視。それを見て魅音が少しつまらなそうにしていたが知ったことではない。

その後、前にいる二人（正確には三人）に一言謝り自己紹介をする。

「名前は社陣。よろしく」

そう言うと今度は向こうから自己紹介をしてくる。

「北条沙都子ですわ」

「古手梨花なのです」

「二人ともこれから買い物でしょ。これ以上引き止めたら悪いし、こっから先は学校でってことでいいかな？」

そしてこの場は解散となり、俺達は再びこれから住むことになる家に向かった。

それから5分とかからずに俺達は家についた。家の見た目は木造で二人だけで住むには十分な大きさだ。そして此処まで案内をしてくれた魅音に礼を言い、それじゃあ今度は学校でまた会おうねと言いながら帰っていった。ちなみに俺達が園崎家についたのが午後3時過ぎ位で、今はもう日が傾いている。此処に来るまでゆっくりだったとは言え結構時間がかかったようだ。

と、ここでさっきのことを秋名に確認してみる。

「秋名、ちよつとした問題だ。さっきの古手神社の階段下に俺達を含めて何人いた？」

「へ？ どうしたの、急に問題なんて？」

「いいから答える。ちよつとした記憶力チェックだ」

流石にいきなりのことで戸惑っているようだ。

「……なら、俺達と魅音と沙都子ちゃんと梨花ちゃんで5人」

……これで決まりだな。どうやら羽入は秋名には見えてなかったようだ。ということは……管理人のいつてたサービスってのはこれが。最悪だな……あの時はありがたいと思ったが撤回だ。もし、このことがバレたら間違いなく巻き込まれる！

「……えーと、合ってるよね？」

「ああ、どうやら俺が思っているよりバカじゃないんだな」

「それは流石にヒドくない!？」

「いや？ これしきの事に確認をとっている時点でそうでもないだろ」

「もういいです……」

秋名がげんなりしながら家に向かう。少し悪い気もしたが、実際にそう思ったのは事実なので、まあいいだろう。そして俺も秋名の後に続いて、これから住むことになる家に向かう。

こころして、時は夕暮れひぐらしのなく頃に俺達の難見沢での日常
がはじまった。

始まり その四（後書き）

さて、今回もここまで読んで下さったことに感謝いたします。
今回までがプロローグの部分です。はい、ようやくです！ 次に
短編みたいのを出してから本編に入っていきます。出来れば、次
も読んで貰えることを願って。では。

TIPS「二つの期待」(前書き)

大変長い間投稿が遅れて申し訳ございません。しかも今回もそんなに長くないので重ねてすみません。それでも読んでもらえたら幸いです。……誰か休みくれないかなーorz

TIPS「二つの期待」

(あうあうあう〜沙都子がかわいいのです)

羽入が私の隣で騒ぎながら沙都子を見ている。そして、その沙都子は買いにきたキャベツを買おうとしているのだが、先程からキャベツとレタスが置いてある場所を行ったり来たりしている。今はその両方を手に取って見比べているところだ。羽入ではないが、確かに今の沙都子の姿はとてもかわいいと思う。そして、そんな姿を見る事がこの世界での楽しみの一つでもあるのだ。

と、ここでさっき買い物に来る途中で会った二人のことを、羽入と相談しようと思った。幸い、沙都子はもうしばらくあのままだろうから心配ないだろう。

(羽入、ちょっと相談したいことがあるのだけれど)

(あう？ 何ですか、梨花)

(ここに来る途中に会った、魅音と一緒にいたあの二人について)

そう言った瞬間、羽入が真面目な顔になった。

(圭一以外の転校生だなんて、こんな世界は初めてよ……。羽入はあの初めてやって来た二人についてどう思う?)

(あうあうあう。ボクもよくわからないのです。でも、あの二人が今まで一度も現れたことがなかったことだけは確かです)

やはり羽入にもよくわからないようだ。今までにない出来事に内心、動揺しているが羽入の様子を見る限り、あっちもかなり動揺しているらしい。

(……ただ)

(ただ?)

(あの梨花と同じ年位の男の子の方。よくわかりませんが、何だかボクに‘近い’感じがしました)

羽入の突然の言葉に混乱する。

(羽入に‘近い’って、一体どういうこと? 説明して頂戴、羽入)

(あああうう。ボクにもよくわからないのです。ただ何となくそんな感じがしたただけなのです)

どうやら本当に本人もよくわかってないらしい。

(それともう一つ、これはボクの気のせいかもしれませんが、今言った方の男の子、確か……社陣と言いましたか? もしかしたらボクのことが見えていたかもしれないのです)

「っ!?!? それは本当!?!?」

「梨花ー。いきなり大声を出したりして、どうしましたの?」

しまった! あまりの事につい叫んでしまった。

「み、み……。何でもないので。それより沙都子、キャベツはまだですか？」

「も、もうちょっと待って下さいまし。すぐに持ってきますから！」

……危なかった。何とか沙都子をごまかすことができた。

（梨花、大丈夫ですか？）

（ええ、それよりさっき言ったことは本当なの？）

そう改めてきいてみると羽入は少し慌てだし

（で、でもさっき言ったようにボクの気のせいかも……）

（でも、そんなことを言いだすからには、何か根拠かなにかあるんでしょう？ だから教えて。どうしてそう思ったのか）

（はい……わかりました）

そう言って、羽入が話し始める。

（本当に些細なことなのですが、陣から名前を聞く前、本人はぼーっとしていたと言っていました、無反応な時がありましたよね？）

（ええ、確かにあの時は様子が変わったわね）

（その時に、一瞬でしたけどボクと目が合いました。本当に一瞬だったのですが、視線が外れてしまいました、でも何だか視線が外れたというより、外された、ような違和感を感じたので……）

(それで、もしかしたら自分が見えていたんじゃないかと思っただけね……)

(はい……)

そう言われれば確かにあの時、彼の目線は私や沙都子には向いておらず、羽入の方を向いていた気がする……。でもそれなら変だ。本当に羽入が見えているのなら、何故その場で羽入の存在のことを言わなかったのか。そして目線を外す意味もわからない。これではまるで、羽入が見えていることを隠しているみたいだ。しかし、そんなことをする理由がわからない。それとも、本当に羽入の気のせいで、見えてはいない？ ……ダメだ。いくら考えても答えが出てこない。

(梨花……)

(とりあえずこの件は保留にしましょう？ 今考えてもどうしようもないわ)

(わかりましたのです)

それにしても……

(本当に羽入が見えていたとしたら……一体何者なのかしら?)

(それは……ボクにもわからないのです)

(そうね。そうだったわね……でもあの二人がこの世界にどんな運命をもたらすのか、少し楽しみだわ)

そう言つと、羽入がつらそうな顔になり

(梨花……)

(わかつてる。あまり期待はするなって言いたいんでしょう？ でも、もう私が縋れるものはそんなに多くない……。だから……。ちよつとだけよ)

(……わかりました。梨花がそう言つなら)

さて、話はもうおしまい。あとは学校で、またあの二人に出会つてからだ。

とりあえず今は、ちゃんとキャベツを持つくる沙都子を褒めてあげよう。

TIPS「二つの期待」（後書き）

さて、毎度のことながらここまで読んでもらったことに感謝いたします。次からちよつと話を長めにしたいと思っておりますので、投稿が遅くなると思いますがご了承下さい。

感想の方からご指摘があったのでこの場を借りて返答したいと思います。

では返答

主人公は管理人にもつと他に聞くことがあるんじゃないか（例今は昭和何年の何月何日だとか）

はい、おっしゃる通りです。すみません。わたしの知識不足で正確な日にちがわからなかった為、端折らせてもらいました。ちなみに今は圭一が一旦都会にいつて帰って来てから数日後となっております。

羽入は実体化してないと主人公が言った根拠はどこからきたの？

主人公の知識では羽入が実体化したのは祭り雛子編しかみたことがなく、（というかわたしも祭り雛子編しか知りません）無数の世界の内、今の世界がその世界である可能性が極めて低いと考えた為です。

主人公は元の世界に帰りたいのか、そうじゃないのか。「今すぐ俺を元の世界へ帰せ！」と言ったそばから「こっちの世界の方が都合が良い」と言ったり、どっちやねん。

正直どちらでもいいんです。なら何故「今すぐ帰せ」と言ったの

かは、本編で本人が何度も言ってるように惨劇に巻き込まれたいくないからです。元の世界に帰る以外、他に惨劇に巻き込まれないようにする術がないから、だから『今すぐ帰せ』なんです。

羽入が見えることが主人公にとってのアドバンテージになるとは思えない。別に見えても見えなくても変わらないんじゃないか。

これについてはネタバレになるので保留とさせていただきます。

ここからは感想

主人公達は気付いてないだけで実は何度もループしている、なんてオチがあつたり……

あ、それ面白いかも。なんて思った自分がいました。でも今回でその線はなくなりましたのでご了承下さい。

以上。感想はどんどん書いてもらえたら嬉しいです。ご指摘の方は、わたしは今回の小説が初めて書いたものといったことを配慮していた上でお願いします。流石に沢山指摘されると凹みますので……。

日常編 その巻（前書き）

皆さんお久しぶりです。

約2ヶ月ぶりの更新となります。さて、長く書くと言っておりましたが自分には無理だと悟りました。うん。こんなに更新が遅れたくせになにいったんの？ って思った方々、本当にすみません……。いつもどうり短いですがどうぞこの駄文を読んで下さい。

日常編 そのき

ジリリリリリリリリ！！

今まで心地よい眠りを堪能していたのだが、うるさい音がすぐ近くで鳴り響きそれを妨害し始めた。いまだ意識のはつきりしない中、手探りで音の発信源を探す。すると、左手に固い何かが当たり、それを掴むと右手で今左手に捕らえている物に向かって勢いよく振り下ろした。こうして、今まで鳴っていた音は消え、再び眠りにつく。早い話が、目覚ましが鳴りそれを止めて二度寝しただけである。しばらくして、部屋に誰かが入ってきた。といっても、この家には秋名と陣しか居ない、そしてオレ（秋名）はこの部屋で寝ているので自然と入ってきたのは陣であることがわかる。陣は秋名の近くまでいき声をかける。

「おい、いい加減起きろ。もうメシもできたし、それ以上寝てると遅刻だぞ」

陣の声にオレの意識が少しだけ覚める。しかしいまだに眠気がとれない。

「うーん。あとちょっと……」

「……あっそ」

オレの言葉を聞いて陣が部屋から出ていったのを感じながら二度目の眠りについた。

カチツ　カチツ　カチツ　カチツ

「ってこれ以上寝てたら遅刻って、ちよつともなにも寝てたらアウトじゃん!？」

しばらく眠っていたら陣の言葉が急に浮かんできて意識を覚醒させる。そして、大急ぎで身支度をすませ茶の間に向かうと、そこには並べられた朝食があり、すでにそこにいた陣は殆ど食べ終わっておりすぐにも学校に行ける状態のようだ。ちなみに並べられた料理は殆ど陣が作ったものである。オレは家事が一切できない。それも壊滅的に。なので陣が家事を担当している。といつても陣は家事が得意という訳でもなく、人並みにできる程度である。

「ちよつと陣！　遅刻しそうならもつとよく起こそうとしてくれないじゃないか！」

オレは陣にむかってそう言うと、陣はあからさまに不機嫌な顔でこちらを睨みつけてきた。その視線に一瞬気圧されたが、こちらも負けじと睨み返す。

今日は学校に初めて行く日である。転校ということになっているが初日から流石に遅刻は出来ない。確かに目覚ましを止めて二度寝したところを起こしに来てくれたのは感謝するが、それなら一回言っただけですぐに起こすのをやめるのは流石にないんじゃないかと思う。どうせ起こしにくるならちゃんと起こしてもらいたい。それが遅刻ギリギリの時間なら尚更だ。

そんなことを思いながら睨み合いをしていると、徐に陣が口をひらいた。

「ほー。お前がそんなことを言うとな。お前が呑気に寝てる中、一切家事の出来ないお前にかわって朝早起きしてまだ眠い中お前の

分の朝食と弁当を作ってやってたんだぞ。それがだいたい作り終わった時お前の部屋から目覚ましの音が聞こえてきて、それが止まったのにお前が起きてこないからわざわざ起こしにいつてやったのもかかわらず、『もうちよつと』なんてこつちは眠い中働いていたのに文字通り寝言をほざいた貴様をきちんと起こせだ？ お前は一体何様のつもりだ？ ああ！？」

「すみませんでした！ 返す言葉もございません」

陣の言葉にすぐさま土下座を決行。もし、普通にオレと陣で二人暮らしをしたとするなら、

オレが家事が一切出来ないことを陣は知っているのです、陣が朝食と弁当の準備をするのは必然になり、本来ならさっきのオレの言い分は通るのだが、今の状況は陣が二人暮らしを認めてしている訳ではなく、強制的にしなければならぬ訳で、しかもその原因はオレなので何も言い返せない……。

何故だろう……普段と余りかわらないかと思ってしまった自分がここにいます。でもそんなの気にしないさ！

……ホントですよ？

「……もういい。いつまでもそんなこと（土下座）してていいのか？ 本当に遅刻するぞ」

「あああああ！ そうだったー！」

土下座を即座にやめて朝食を大急ぎで口に詰め込む。折角、陣が早起きして準備してくれた朝食なので残したり、ましてや食べないといった選択肢はない。一方、陣の方はすでに食器を片付け始めている。つてかオレの土下座を無視してメシ食ってたな、絶対。

遅刻もそうだが、陣に置いていかれまいと急いで食べたせいで、

何度か喉を詰まらせて死にそうになったがなんとか朝食全てを見事
完食、その時点で陣が玄関に向かうのを見て焦り、大急ぎで食器を
片付け既に玄関のところにいる陣に追いつく。

いや、うん。マジでオレを置いてくつもりだったね。

「顔色悪いぞ。大丈夫か？」

「い、いったい……だれの、せい……だと」

「自分だろ？」

「はい、そのとおりです……」

ちくしょう、今無償に優しさが欲しい……。

「バファリンでも飲め」

「いきなり人の心を読まないで下さい」

オレのプライバシーが、プライバシーが……。

「口からだだもれだったぞ……」

「うそ!？」

「うん、嘘」

あ、嘘か。ならいいや。……あれ? 何かおかしくない?

「ほら、折角急いだのが無駄になるから行くぞ」

「……ちよ、待って！」

何かとても重大なことが発覚したような気がしたのだが、とりあえず遅刻しないため陣を追いかけるのだった。

ちなみに、陣が先に行く際にボソツと「バカ……」とつぶやいた言葉は秋名の耳に入ることはなかった。

秋名と陣が学校に向かっている中、二人の向かう雛見沢分校の教室では、すでに二人の転校生の話題がされていた。噂を広めたのは魅音であり、今その話を部活メンバーである前原圭一・竜宮レナ・北条沙都子・古手梨花の4人と話していた。

「今日から転校生が来るのかー。どうりで朝にいつも仕掛けてあるトラップがなかったわけだぜ」

「ええ、今日は圭一さんなんかに構っている暇はございませんからあの二人には私の^{わたくし}トラップの餌食になってもらいますわ。お〜っほっほっほっ！」

「ちょっとまって！ 沙都子！ この前原圭一に対して今のセリフは聞き捨てならねえ！」

「事実ですよ。お〜っほっほっほっ！」

何をー！ っと圭一と沙都子の二人がじゃれあい始める。

「ところで沙都子ちゃん。あの二人って、転校してくる人のこと知ってるのかな？　かな？」

レナの言葉で圭一と沙都子はじゃれあいを止め、そして、レナの質問に魅音が答える。

「沙都子と梨花ちゃんは、わたしが転校生の二人の家に案内してる時に一回会ってるんだよ」

「そうなんだ。梨花ちゃんも会ってるってことは、知らないのは私と圭一くんだけなんだ……。魅いちゃん、どんな人だったの？」

「うーん……。ああ、そういえば一人はわたし達と同じ位の年の男の子なんだけど、圭ちゃんよりカッコ良かったよ」

「確かに、圭一さんよりは男前でしたわね」

魅音の言ったことに沙都子も同意する。すると、圭一が突然不気味な笑い声を出し始めた。

「……上等じゃねえーか、その転校生とやらがどれほどのものか、俺様が評価してやるうじゃねえーか！」

と、そんなことを話している内にベルが鳴り、みんな自分の席につき始め、圭一達も各自の席について、転校生を待つのだった。

日常編 その巻（後書き）

まずは、ここまで読んでくださった方々に感謝を。取りあえずこれからは短いのをちよくちよく更新していきたいと思えます。更新速度はどうなるか未定ですが、出来るだけ早く更新したいと思えます。ホント、ページが二桁いつてる人達は尊敬に値しますね。

日常編 その貳（修正）（前書き）

すみません。抜けていた文を加えて修正しました。
ご迷惑をおかけしましたm（| |）m

日常編 その貳（修正）

朝のドタバタから、何とか遅刻をせずに学校に到着し、今は職員室の中で、オレ達はすでに知っている人物、ご存知、知恵先生こと知恵留美子先生とお話中である。話の内容は簡単な自己紹介とこの学校の説明などで、大体の話はもう終わったところだ。

「それじゃあ、これから教室に向かいますけど、みなさんいい子ばかりなので緊張しないで、リラックスしてくださいね」

はい、と陣と一緒に返事をしたあと、教室にむかう知恵先生について行く。そして職員室を出てすぐに教室の前までたどりついた。と、二コマで

「あ！ ごめんなさい。職員室にちょっと忘れ物をしたみたいだから、先に教室に入ってもらっててもいいかしら？ すぐに戻ってくるから」

どうやら何か忘れ物したらしく、そう言うと知恵先生はすぐに職員室に引き返していった。

知恵先生がいなくなりオレと陣だけになった訳だが、先に教室に入っているよう言われたにもかかわらず、二人揃ってその場を動く気配がない。

「陣、教室に入らないの？」

「そう言うお前こそ入らないのか？」

この言葉のやりとりから恐らく陣も気づいているのだろう。そう……トランプが仕掛けてあるということをし

たしか圭一とレナが転校初日のときにトランプに引っかかっていた筈だ。その事から考えてオレ達に対してトランプを用意している可能性が極めて高い。っていうか沙都子ちゃんの性格からして絶対仕掛けてある！

そこに畏が、しかも極めて凶悪なものがあるとわかっていて飛び込むバカはいない！

フッフッフ、いくらオレでもこれくらいはわかるのさ！

「陣だつてわかってるでしょ？ トランプが仕掛けてあることくらい」

「まあ、流石にそれぐらいはな。だが、どちらにしろお前が先に教室に入ることには変わりはないぞ」

「何故に!？」

オレが先に教室に入る？ 意味が分からない……。何故そんな既に初めから決まってるみたいなおっしやってるんですかね？

「何も不思議がることもないだろ？ このトランプは早くクラスに馴染めるようにって、ちゃんとした目的があるものの筈だぞ。実際それでレナも圭一も早くクラスに馴染むことができた筈だ。まあ、一概にトランプのお陰だとは言えないけど、きっかけになってることだけは確かだ」

「だったらさ、クラスに馴染めるようにするのが目的なら、別に陣でも問題ないじゃん」

未だにトラップを怖れるオレは先に教室に入することを拒む。

「確かにそうだが、忘れたのか？　今回はお前一人で惨劇を回避させなきゃならないんだぞ。そのためには部活メンバーから信頼される、それが少なくとも仲良くなつとかねえーといけないだろーが。トラップはその近道だと思え」

確かに陣の言葉は一理ある。……しかし、しかし！

「だからって、あんな凶悪なトラップにかかりたくない！」

「……お前一体どんなトラップを想像してるんだよ？」

「え？　うーんと、サッカーボールやバスケットボールなんか飛んできたり、箒やモップとかトイレで使用されてる雑巾が飛んできたり……」

何故だかオレが想像するトラップを話すと陣が溜め息をついた。

「お前なー。転校初日にいきなりそんなのがくるわけないだろ。もし、そんなのがきてみる。普通ならすぐに不登校に陥るぞ」

ふむ。確かにオレが言ったトラップは既に何回もトラップに挑んでいる圭一に対して仕掛けられたものだ。
と、いうことは……

「安心しろ。最初は流石にまだ軽い筈だ」

その言葉にオレは今まで怖れていたトラップを全然怖れなくなっていた。いや、寧ろ惨劇を回避するための第一歩になるなら喜んで

先に教室に入ってやろうとさえ思えてくる。

「あ、ちなみにトラップを避けたりするなよ。普通ならトラップが仕掛けてあるなんて思わないからな。だから、普通は引つかかる。それなのに警戒してトラップを避けたりなんかしたら怪しまれるから」

「うん、わかった」

そうして、オレは目の前にあるドアを開け教室に一步踏み込んだ。

思えばこの時、オレは気付くべきだった

完全に教室内に入ったオレを待っていたのは頭上から落ちてくる大きなタライ。

グワーン！ と大きな音と同時に襲ってくる頭の痛み思わず両手で頭を抱えてうずくまる。そしてその場を動かさずにうずくまっていたのがいけなかった。何故か数秒後に水が上から降ってきて見事に全身に掛かり、オマケに水が入っていたとされるバケツがまたもや脳天にクリンヒット。オレはそのまま前のめりに倒れましたよ。

例え軽いトラップだとしても辛い目に遭うことに変わりはないのだということに。

早い話が、オレは陣の話に見事のせられたのだ。とは言っても少なくとも陣の言葉に嘘はないため、遵って騙された訳でもないのに怒ることもできない。このやり場のない感情をどこにぶつけるべきか、全身ずぶ濡れで頭が痛む中、オレはそんなことを考えていた。

日常編 その貳（修正）（後書き）

いつもながらここまで読んでくれたことに先ずは感謝を。

今回のお話は私の勝手な自己解釈がまじってますが気にしないで下さい。

それでは、更新が不定期ですがなるべく早く更新出来るよう頑張ります。

最近というか結構初めから秋名をいじめてばかりだな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6329i/>

ひぐらしのなく頃に 旅

2010年2月24日18時54分発行